

「本を読む大切さ？」

電子制御工学科 清水 共

「本と最初に出会ったのはいつなのだろう？」と思い返す、ある場景が思い浮かぶ。そこは、親戚一同が集まる場面であり、母が皆に愚痴を溢している。「小さい頃、あんなに本を読み聞かせてあげたのに、どうして家の子供達は読書好きにならなかったのか」と。確かに私は読書好きではない。小中学校時代には、読書感想文を書かされる事が苦痛で仕方がなかった。しかし、図書館に通っていた記憶はある。「何をしていたのか？」 そうだ、漫画で書かれた偉人伝などを読んでいたのだ。漫画も書籍の一員ならば私は、かなりの読書家なのかもしれない……。このように、小さな頃からどっぷりと漫画の海に浸っている私ではあるが、最近(?)、昔ほどの情熱が薄れている事に気づかされている。「何故なのだろう？」と自分なりに分析してみる。総務省情報通信政策研究所のデータによれば、コミックス新刊刊行数は2000年には年間約八千点で右肩上がりに成長しているが、この中から自分が読みたい本をピックアップすれば、その数は高が知れる。そう、読みたい本は殆ど読んでしまっていたのだ。その結果、私の触手は小説やライトノベルへと伸び相対的に漫画への情熱が薄れていると感じる訳である。ようやく活字媒体としての本を楽しみ始めた今日此の頃である。取り留めのない話で、依頼された原稿内容から大きく逸れてきたが、逸れたついでに、私の大学時代に出会った一人の変わった(すごい)先生の話を紹介したい。十数年前、筑波大へ編入学して最初の実験の授業で初めてその先生と出会った時、第一声が「鉄人28号はどうやって動いているのだろうか？」というとても真剣な問いだった。実験のはじめの数分間であったが非常に白熱した議論が展開された。その先生こそ、山海嘉之教授だ。人体密着型ロボットスーツの開発者である。9歳の時に母親に買ってもらったアイザック・アシモフの『私はロボット』という本をきっかけにロボットに興味を持ち、情熱を失うことなく世界で初めてロボットスーツを開発したその人だ。先生の話の中に、『高等教育において必要なのは、「学ぶ力」だけであり、それさえあれば、やりたい分野で勝手に知識をつけたり開拓したりする。』という名言(私が勝手に思っている)がある。本筋から大きく外れた話を無理やりちょっとだけ軌道修正すると、本校の図書館には約9万冊もの蔵書が存在しているそうだ。情熱を傾ける対象を探しに行くのも良い、思う存分知識を身に付けるのも良い、本校図書館は正に打って付けの環境だ。私が漫画に掛けていた情熱とは大分かけ離れた壮大な話と思うかも知れないが、人が生きていく原動力は「楽しむこと」であると思う。この点から、漫画を読むこと、書籍を読むこと、知識を吸収すること、勉強すること、研究すること、その他諸、全てが「娯楽」ということだ。だから漫画に飽きても大丈夫。日本発行の本が集まる国立国会図書館の情報を参考にすれば、日本では図書や逐次刊行物等資料、併せて年間100万点以上が刊行されている。世界に目を向ければその数は計り知れない。即ち、世の中「楽しいこと」だらけということだ。

無理やり纏めて結局言いたいことは次の一言。私のように本を読まないと、こんないい加減な原稿しか書けなくなるので、「皆さん」、私を反面教師にして本を読みましょう！